

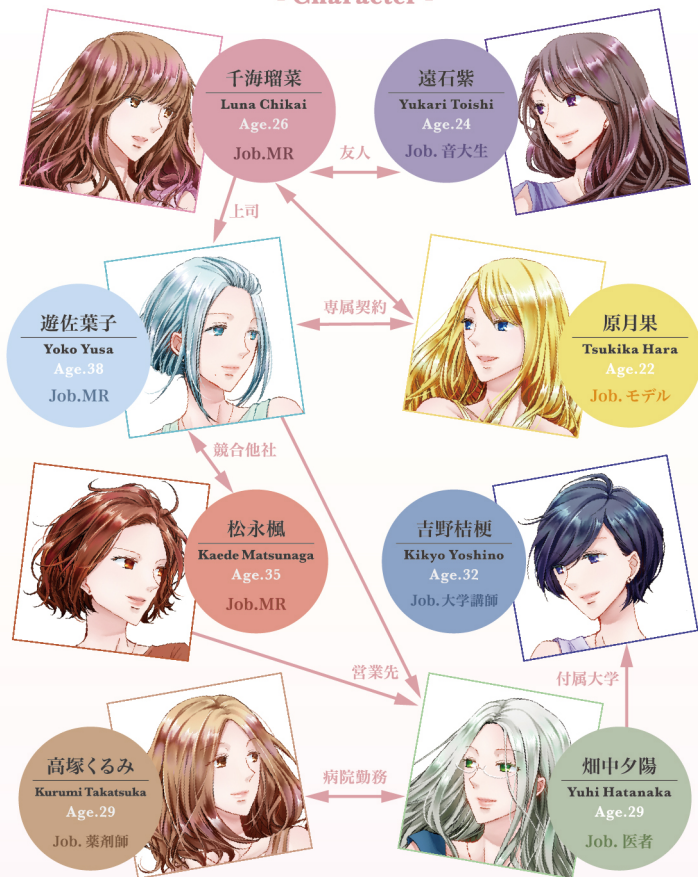
# Saturday

- Unperfect Eve -

Presented by Nina Seira & Ruri Hazuki

# Saturday

## - Character -



# *Saturday*

*- Unperfect Eve -*

**We color your everyday with something Saturday!**

人の家で飲むコーヒーが、わたしは好きだ。特に土曜日のお昼過ぎ、たつぷり寝足りた気持ちで、こんなに眺めのいいマンションの高層階で飲むコーヒーは、完璧な休日の意味がする。

夜は一晩中、特等席で東京タワーが見える港区の高級タワーマンションという響きほど下品じゃなくて、いい部屋だ。人を連れ込んで口説くためにあるような場所なのに、どうやら忙しすぎて、部屋の持ち主さえもあまりこの部屋にいないらしい。もう少しで十三時になる休日の窓の外は、ぴかぴかと九月らしい高さで空が晴れており、あまりにきれいで、なんだかお土産用のばかげたポストカードみたいに見える。

「飽きないの？」もうずっとそうしてるけど、と背中から声を掛けられて、わたしはにつこりして振り返った。「飽きません」

そう、とそれ以上会話を続ける気のない相槌が返ってきて、わたしももう一度につこりして会話を終わらせる。もうすぐみんな来るかしら、と細いフレームのめがねをかけた女の人が、今度は明確な独り言として呟いた。

白衣を脱いだお医者様というのは、それだけでとても寛いで見える。激務と言って

いい仕事で疲れているはずなのに、薄い肌の下、透けて見える隈がひとつもない作り物めいた美人は、この部屋の持ち主だ。そんなところまでこの部屋はポストカードっぽい。あるいはモデルルームのカタログ写真めいている。

TVは付いておらず、音楽もかかっていないので、とても静かな午後だ。

「来ないですね、他の人」

コーヒーがなくなったので、独り言をもう一度会話に戻し、キッチンへ入り、マグカップをさつと水ですすいだ。自分の服なら気にしないのだけれど、借りものなので、しつかりと袖をまくる。誰も来ないならアイスクリーム食べてもいいですか、と冷凍庫を開けようとしたら、クリアな音声でチャイムが鳴った。

「今日は死ぬほどクッキーを食べることになると思うから、やめておいたら？」

インターホンの声を聞きもせずに関錠ボタンを押した家主は、ちらりと人のおなかに視線をくれ、親切のつもりらしい忠告の後、すたすたと玄関へ歩いて行く。

まだ食べてもお肉にはならない年なんです、とわたしが口を開いて反論する前に、もう一度高い音でチャイムが鳴った。「鍵のマークがついたボタンを押して」と廊下から指示が聞こえ、いい香りのする背中を追いかけるのをやめて、人差し指で誰だか知らない客人を招き入れてあげた。

「捏造はやめてください」

いやいや、と饒舌なショートボブは首を振った。きれいな襟足がちらちら見える。「タクシーの中の千海、かなりめんどくさかったんだから。そのまま人の家に当然のように上り込んで、お風呂も入らずにぐうぐうベッド占領して眠るし」

ずっとクッションを抱きしめて我慢していた瑠菜が、最後の発言に横に置いてあつたクッションまでまとめて、おしゃべりな同業他社のライバル営業に投げつけた。

「うるさいです。ほんとうるさい」

「あんたねー、一晩の恩がある相手に向かってうるさいとは何事よ」

わたしが私的な感想を一度飲み込んで消化している間に、昨日の晩、いつしよだったの？ とおつとりと感想を挟んだのは葉子さんだった。「なかよしね」

「……あのね、それあなたが言う？ 遊佐葉子」

新たな無駄絡みが始まるうとしたのを遮って、今の不愉快な会話のおかげでようやく適切な質問にまとまった、さつきからずっと気になっていたことを、わたしは努めて冷静に口にした。

「でも、ほんと。みなさん、すぐく仲がいいんですね」

それまで黙って楓さんと瑠菜の口喧嘩を聞いていたメンバーも含めて全員が、一斉

にこちらを見やったのがわかった。人の視線が動くときに、こんなにも明確な音がすることを、いつもピアノの前で人の視線を受けているわたしはよく知っていた。

はじめてこの会にお招き頂いた部外者としての、純粹な感想と発見を、すらすらと言葉にしていく。

「だって、チャイムが二回しか鳴らなかったもの」

今度は全員が、ぎくりと動きを止めたのがわかった。方向性は正しいらしい、とその反応に確信する。部屋を満たし始めた緊張感をたつぷり味わって、わたしは心底無邪気な質問をした。

「いったい、昨晚、どなたとどなたがいつしよだったんですか？」

わたしが言っていることはめっちゃくちゃだ。

別にチャイムが二度しか鳴らなかったからって、何人かが連れだって来たことの証明にはなっても、特定の二人が昨夜一晚をいつしよに過ごして、同じ場所からここにやって来たという証拠には全然ならない。ほんとうに、まったく。

そんなことは分かっていた。ただ、たとえそれがどんなに杜撰なはったりで、冷静

に考えれば単なる言いがかりに近いようなものでも、言われた相手の心にやましいところがあれば、人はその杜撰さに気づかないということの方を、もつとよく知っていた。だつて、わざとらしいのだ。

全員が順に現れたときから薄々思っていたのだけれど、なんとなくちよつとずつ、場の空気が変。最初は、瑠菜以外のみんながみんな、わたしと初対面のふりをしようとしているせいかと思つた。

今日になつてはじめて会つた二人以外は、それぞれ個別に、あるいは何人かまとめて既に会つたことがあり、中には「会つたことがある」以上の人もちらほらという。

そうでなくても、正直知らない仲じゃない。これまでの感じだと、みんな程度の差はあれ、あまり感情をストレートに出す方じゃないことは知っていた。そんな面々が、わたしに関してぼろを出さないようにというよりは、どう考えても、お互いになんとかなく変な距離感があるのだつた。たとえば、まだ一言もお互いの会話に反応していない二人組とか、なんだか妙によく喋る二人組とか。なんだか、ちよつと変。

案の定、わたしが適当に投じた石は、さっきまでにぎやかだった部屋の真ん中あたりに、ぼつんと誰にも拾われないまま落ちていく。どうやら凶星だったらしい。

それにしても、と少し面白くなつてきて思う。別に昨晩いっしょだっただけで、



そんなにおそろしく素直な反応をくれなくてもいいじゃない。まあたぶん、そのうちの何組かは、思い返すと気まずく黙ってしまうような更なる何かが、昨夜二人の間であつたのだろう。

いつまでこの静けさが続くかしら、とにこにこしていたら、プルトップが引かれたばかりの重さを感じさせる音がして、セブンアップの缶がカウンターに置かれた。

「ともかく、クッキーを作りましょう」

宣言をして話を動かしたのは、再び、お医者様だった。

そこからは、早かった。さっきの台詞は聞こえなかったふりをすることにしたらしい吉野桔梗が、キッチンからてきぱきとボウルやらお皿を運んで来て、教室を始める。そういえば、この人の職業は大学の先生だったつけ。

「生地を冷やさなくてもいけるレシピのやつから始めます。新しいコンパスと三角定規、分度器も持って来たから好きな形に抜いていつて」

コンパスって……と思っていたら、ほんとうにあつという間に机の上が数学の授業のようになり、毒気を抜かれてしまう。それは他の人も同じだったようで、わざわざと急に空気が動いた。もう先程の張り詰めたような緊張感はない。詰め時逃して

しまった、と察したわたしはもう一度会話の主導権を握るべく、無駄に大きく微笑んで明るい声を出した。

「いいですね。クッキー、楽しみにしてたの」

今度こそほつと空気が解け、すぐに銘々、飲み物を片手に大理石のテーブルの周りに集まって来る。私、正十七角形を作ろう、と横にやってきた瑠菜が楽しげに呟く。いいわね、とあまり心の入らないまま賛同し、わたしはひんやりとした大理石に触れてみた。まあ少なくとも、いちばん知りたかった人が、昨夜誰といたかはもう知っている。後は、おいおいわかるだろう。

単なる好奇心への答え合わせは少し先送りにして、にぎやかなテーブルの一角に着き、すっかりポーカーフェイスに戻った残り七名の顔をこっそり盗み見る。

―さて、この中でこれから嘘を付く人は誰かしら？



# The Other One

- たがいちがいなオーダーリスト -



Pov.

Luna

Kaede

20:00

0:30

「はあああああああ、終わったあああ」

大きく伸びをし、手首を捻ってそこに光る時計を見ると、七時四十五分過ぎだった。仕事が好きになると、金曜日の夜八時の昂揚感は、決して相反するものではない。

あの昂揚感は、たとえば、お気に入りのコスメを端から使ってするメイクがどんなに楽しくても、数時間後にはリムーバーを使って落とすのが待ちきれないことや、大好きなヒールを履いて家を出た朝、それでも靴に足を入れた瞬間から、そのヒールを脱ぐ瞬間の解放感を思っただけが浮き立つのと同じ原理で出来ている。

どんなに素敵なものでも、私はいつも、終わりを待ちわびていて、それはたぶん、子どもの頃からひどく「めでたしめでたし」が好きでせいかもしれない。

そして仕事はと言えば、基本的には楽しいけれど、もちろんやはり疲れるものだし、「ぐぬぬぬ……」と思うことも多々あるわけで、どうしたって金曜日の午後に突入すると、ふわふわと気持ち軽くなるのは致し方ないのだった。

明日は土曜日。三時間待った後で、ようやく夕陽先生にプレゼンをすることに成功し、今日はもう帰るだけだ。資料の分以上に軽くなった気がするバッグを肩に掛け直

し、清々しい気持ちで病院を立ち去ろうとしたら、ぐつと後ろから手首を掴まれた。

「ふうん、千海瑠菜は外側につけるんだ、時計」

人の腕時計をしげしげと見ているのは、夜は風が少し涼しくなってきたというのに、相変わらずどこか少し挙動が暑苦しいライバル会社のMRだ。

私が待っていた三時間の内、一時間はこの人のせいで、だから、随分前に「ふふん」と満足げに出て行つた後ろ姿を見送つたはずだった。なのに、なんでまだここにいるのだろう。

「夕陽先生に用事なら、この後、夜勤に入られるからまだいらつしやるそうですよ」

そう言つて手を振りほぐくと、「大丈夫、それは知ってるー」とあつさり返された。そうですか、お疲れ様ですとにつこりして頭を下げようとすると、今度はぐつとバツグをかけた肩口を掴まれた。

「わ」

「今日はね、千海瑠菜さん、あなたを待つてたのよ」

ぐるんと人の体を回転させた強引な女の人が、耳元で囁いた。「おなか、空かない？」それをこの時間帯に訊くのはちよつとずるい。お昼はプレゼンの直前準備に追われていて取れていないし、朝ごはんなんて、本当に食べたのか疑わしいほど昔の話に思える。

「空きましたけど……」

それはつまり、この次に来る質問に対する先回りした承諾だとわかりながらも、私はぼろりと本音を乾いた唇からこぼした。そういえば、リップだってもう十二時間以上塗り直していない。先週末買ったばかりのリップジャムの新色は、会社を出るときに唇に乗せたのが最後だ。

身構えた「次の質問」は飛んでこなかった。代わりにさくつと結論が告げられる。

「はい、決定。じゃあ、行こう」

ブレゼンが終わった打ち上げ、という言葉に思わず内心首を傾げる。

えーつと、私、楓さんの後輩じゃなかったですよ？

十  
十  
十

「……珍しい。ほんとにオシャレですね」

「うわー、心外だわ。言っただでしょう？ 松永楓はね、約束は守りますよ」

大丈夫大丈夫、ちゃんとオシャレなところに連れてくから、と言われて引つ張って来られたのは、たしかにオシャレで素敵なお店ではあった。雑然とした新宿の街を抜け

た先に、ぽつんとある半地下のカフェ。手元が怪しい間接照明に、ふわりとしたアロマのいい香り。いかにも女の人が好きそうなお店だ。そして悔しいことに、私はそういう女の人が好きそうなお店と言うのが、ことごとく好き。お昼に何度か楓さんに連れられていったのが中華料理や定食屋だったこと、隙あらば赤ちょうちんが下がるお店に行きたがることから鑑みると、今回のお店はたしかに、かなりのおもてなし精神を感じた。

でも、そういうことじゃない。

向かいに座った女の人は私の上司でもないのに、なんでこの人の声に、こんなにも逆らえないのだろうか。

その妙に出来の良い声に、「明日、十一時だっけ、十三時だっけ」と訊かれ、反射的に答える。「あの会が午前中スタートなわけはないでしょうから、十三時じゃないですか」そう、だいたい明日だってまた会うのだ。夕陽さんのおうちで、他のいつものメンバーもみんな交えてではあるけれど。なのにほんとに、なんでなんだろう。

先週末から、ずっと夢見ていた。今日は久々に早く家に帰って、ゆっくりお風呂に入ろうと焦がれていたのに。

夏の名残のラムネを冷蔵庫から出して、海外ドラマを観ながらペディキュアを塗り直して。そのためのラムネと新しいネイルだつて、ちゃんと揃えていた。

ラムネは、この間遊びに来た紫が持つてきてくれたものだ。アイスクリームを頼んだのに、「アイスは切れてたから」とわけのわからないことを言つて、到底そんなものが出てくると思えないロンシャンのトートバッグから、「代わりに、これ」とガラスの瓶を取り出して置いて行つた。

たしかに私には昔から遠出をする、すぐにラムネを求めて売店を覗く癖があり、紫はそれをよく知っている。でも、そもそも深夜にブランドもののバッグから出てくるようなタイプの好物ではなくて、思わず嬉しさよりも驚きが勝つた。「どこかへ遊びに行つて来たの？」と尋ねたら、「そんなところ」と返されて納得することにした持ち重りのする一本は、その晩、なんだかもったいなくて飲めずしまったまま、今も冷蔵庫の特等席で眠っている。

そういえば、ネイルも頂き物だ。これは先ほど、夕陽先生から頂いた。真剣な顔で私のプレゼンを聞いていたお医者様は、最後に一言「なるほど」と呟いて、「検討した後、連絡します」とファイルを閉じると、いつもの顔に戻つてそう言えば、と立ち上がった。

「兄から海外旅行のお土産にもらったんだけど、私はこういう色は使わないから、よ



かったらあげるわ」と手渡されたのは、ころんとしたピンク色のエナメルだった。ポップでかわいいホットピンク。お休みの日に付けたくなる色だ。「ありがとうございます！」まだ結果はわからないけれど、既にひとつご褒美をもらったようで、私はその小さな瓶を、中身の液体よりだいぶ淡いトーンのピンクに染められたバッグにしまった。

受け取った爪先は、ここ数年ではじめて、先端がばらばらと剥けている。ジェルネイル一辺倒だった学生の時から、今は落とすべきときにいつでもすぐ落とせるセルフネイル派になったのはいいけれど、こうやってバタバタした日々が続くと、不摂生がすぐ手元に出て、視線を落とすちょっと落ち込んでしまう。爪の真ん中だけぐずぐずと残っている淡いピンクは帰ったらすっぱり落として、このバカンスネイルに塗り替えるんだと思うと、それだけでもう週末が来たような気分になった。

そういう頂き物の綺麗な瓶に囲まれて、ひとりで優雅な夜を過ごすつもりだった。なのに、私は新宿の外れで、今晩はまったくめくる気のなかったメニューという紙を差し出されている。夜泥棒は、片方だけ髪を耳にかけた女の人だ。人の気も知らずに、すっかり寛いだ様子で何度か首を鳴らし、「何にする？」と尋ねてくる。

「……………」

気持ちを切り替えるために、私はどんなメニューにも必ず書かれているアルコールの名前を空で口にした。

「……とりあえず、ビールで」

やれやれ。

だって、しょうがない。優雅な夜がなくなったのなら、せめてにぎやかな夜を楽しまない。そう決めてしまうと、楓さんの意思表示は待たずに、やたらいい香りのするおしぼりを渡しに來た店員さんに、「ハイネケン二つで」と勝手にまとめて注文をした。

ぐるりと改めて店内を観察し、手元のおしぼりを使う。ひんやりと冷たい感触が掌に心地良い。ほうつと頬に添えて大きく息を吐くと、ふんわりと両手からネロリの匂いがした。いい香り。ビターオレンジの花から取れる香りが、こんなに穏やかでやわらかだなんて、最初に知った時には、ほんの少し辻褃が合わない気持ちになった。

一見、いかにも高飛車な香水が似合いそうな楓さんからは、医療関係者らしく、今まで香りらしい香りがしてきたことはないけれど、この香りはちょっとだけこの人に似ている。

**Adult but Platonic.**